Kawa-Bay未来投資会議

比久見の工場跡地の再開発による川辺町の活性化策（たたき台）

概　　要

■川辺町合併60周年の後の100年の計。

「川の水は絶えず変わり続ける」そして、大海に繋がる、その一歩を踏み出そう。
小さな一滴も集えば大河となる。さあ皆で大海に漕ぎ出そう。

Kawa-Bay　Lets　Go！

■ポスト60周年に向けた、町民総意に基づくエリア全体を巻き込んだ、未来投資プロジェクト。

比久見工場跡地の有効利用を切り口に、スポーツ観光（ボート、カヌー、サップなどの水辺のスポーツはもとより、ゴルフやトレッキング等）をベースに、周辺の市町村の観光資源を含め、一筆書きの地域活性化プランを策定。

■新たな産業興し

地元で生業を持ち、その複業化により豊かで誇れるライフスタイルを創る。

プロジェクトの背景

・「川辺町は今日も晴れやかなり」がキャッチフレーズですが、果たして約80年後は如何に。日本全体が人口減少、超高齢化する中、今世紀末には2,800人の町になるともいわれてます。人口減少を止めるためには豊かで楽しく刺激的なエリアづくりが不可欠。
・川辺町は戦前までは「綱場」を有する林業で栄え、戦後は川辺ダムの恩恵もあり工業、農業が主体となり周辺の事業所拡大により無難推移。
・しかしながら、現在を見渡すと、コミュニティは崩壊寸前、社会的な問題山積、辛うじてダムにより堰き止めている状況が見てとれる。ダムを壊して都市部に流れ出るか、ダムを堅牢化させ、川辺町を魅力あるまちにして、より多くの水を呼び、ダムに貯めることができるかを今、町民皆で考える時。
・これからの川辺町をどうするのか、町民の皆様の知識やアイデアを総動員して考えるのが「Kawa-Bay未来投資会議」です。
・まずは、長らく遊休地となっている7,000坪の工場跡地の有効利用から考えましょう。

プロジェクトの範囲

1.「Kawa-Bay未来投資会議」が町の将来構想を町民の皆様と考え、その具現化のための実働部隊を結成。実働部隊は将来のまちづくり組織そのもので、独立採算を目指し、株式会社化も視野。スイスのブルガーゲマインデ（住民自治経営組織）が参考になる。

2. まちづくりは仕事興し。新たな産業、事業を興すこと。皆で知恵を絞って100年の計を立てよう。→スポーツ観光を新たな産業化

3. 工場跡地の有効利用計画を策定して実施。（スポーツ観光の拠点化）

4. スポーツ観光による地域活性化プロジェクトを近隣市町村と連携。
川辺町が中心地で音頭取り。美濃加茂市、八百津町、白川町、可児市など

プラン

1．工場跡地の再開発事業

★交通の要衝、ダム湖畔にある絶好の場所

★スポーツ観光を基軸に「交流の拠点」を設置

2．新たなスポーツ観光産業開発

★日本版ブルガーゲマインデ（住民自治経営組織）を創る

・・・　Kawa-Bay未来投資会議の実働部隊

プラン　1（工場跡地の再開発事業）　の必要性

なぜ、比久見工場跡地の再開発が必要なのか？

・何のために、誰のために行うのか？　→川辺町発展、川辺町民のため

・町盛の衰退、少子高齢化、財政悪化、人口減少に歯止めを掛けるため何をなすべきか？　　→交流人口～定住人口を増やすこと

・川辺町の魅力ある埋もれた観光資源の発掘、新たな観光資源の開発が必要

＜共通認識＞

□川辺町はボート王国。　→　ダム湖の魅力を一層伸ばす事が重要

□埋もれた資源　→　歴史遺産、比久見の工場跡地など

□新たな観光資源（スポーツ観光）の開発

①ダム湖のボート競技以外の利用（サップ、カヌー、トライアスロン）

②周辺の山のトレッキング

③近隣のゴルフ場との連携

川辺で山川のスポーツ遊びし放題

新たなスポーツ観光産業興しが
定住人口を増やす

★スポーツ観光を基軸とした「交流の拠点」として、
比久見工場跡地の再開発を行う

開発のイメージ　➡＜交流の拠点＞　町民や訪れる方の交流の場づくり

①行政として必要な機能を置く

→　まちのPRや情報発信基地として観光局（課）を設置する

②スポーツ観光を広げる場とする

→　住民の憩いの場のみならず、生きがい、稼ぐ場とする

スポーツ観光開発のため、何が必要か考え、企業誘致を図る

交流の拠点づくり（初期プラン）

★初期段階としては、コストを最小限に抑え、交流の場を作る

★親水性をキーワードに、いくつかのエリアを設ける（将来の拡張性を持たせる）
①事務局（町の観光局〈課〉、情報発信基地、まちづくり）
②常設チャレンジショップエリア・・・様々な起業をサポートする（芸術家、工芸もOK）
③ステージやデッキテラス、デッキ散策路（カフェ、事務局など）
④バーベキュー・グランピングエリア
⑤芝のイベントスタジアム及びイベント時のテントショップ

★隣接するB&G海洋センターに手を加え、一体的な活用を図る

≪レイアウト図参照≫

N
消防署
車両出入口を分散→混雑を避け・通りに活気・緊急車両への配慮
B＆G
リニューアル活用
P
P
レクリエーションフィールド
イベント時ショップテント
トイレ
モニュメント
残土での築山
芝のイベントスタジアム
大型レジャー用桟橋
カフェ
事務局
常設チャレンジショップエリア
ステージ・デッキテラス
デッキ散策路

プラン　2（新たな観光産業開発）の必要性

川辺町の第5次総合計画の重点プログラムに「かわべシビックプライドづくり」があります。

ところでなぜスイスのツエルマット（アルプスの中腹にある人口5,700人の町）に毎年200万泊の観光客が訪れるのか。確かに雄大なアルプスの自然という財産がありますが、何故リピートして観光客が訪れるのか。「この地に住む人々がブルガーゲマインデを通じて地域に愛着と誇りを持ち心から豊かに暮らしている」からなのです。「こんな場所に自分も住んでみたい」と感じ異日常を感じるため世界中からリピーターが集まる。これには100年以上の歳月がかかっています。

「地域住民が凛として暮らす」例えば川辺の町民が何らかの形でスポーツ観光産業に関わる。ボート、カヌー、トレッキング、ゴルフなどのインストラクターやダム湖の清掃でも良く、老若男女が皆関わることが重要。

スポーツ観光産業を開発推進するのが地域住民経営組織（ブルガーゲマインデ）なのです。スポーツ観光に携わり収入を得、楽しく豊かに暮らせることが可能となります。

スポーツ観光産業と
住民自治経営組織との関係

住民自治経営組織を「Kawa-Bay」と仮に呼びますが、「Kawa-Bay」がスポーツ観光産業の開発から運営まで行う。今回のテーマ『交流拠点』も本来は、株式会社化した「Kawa-Bay」が計画から資金調達、建設、運営まで行う。専ら行政はPRとバックアップに徹するべき。

スポーツ観光産業　①ダム湖のボートや水辺の楽しい遊び（サップ、カヌー等）
②周辺の山のトレッキング
③ゴルフ場との連携

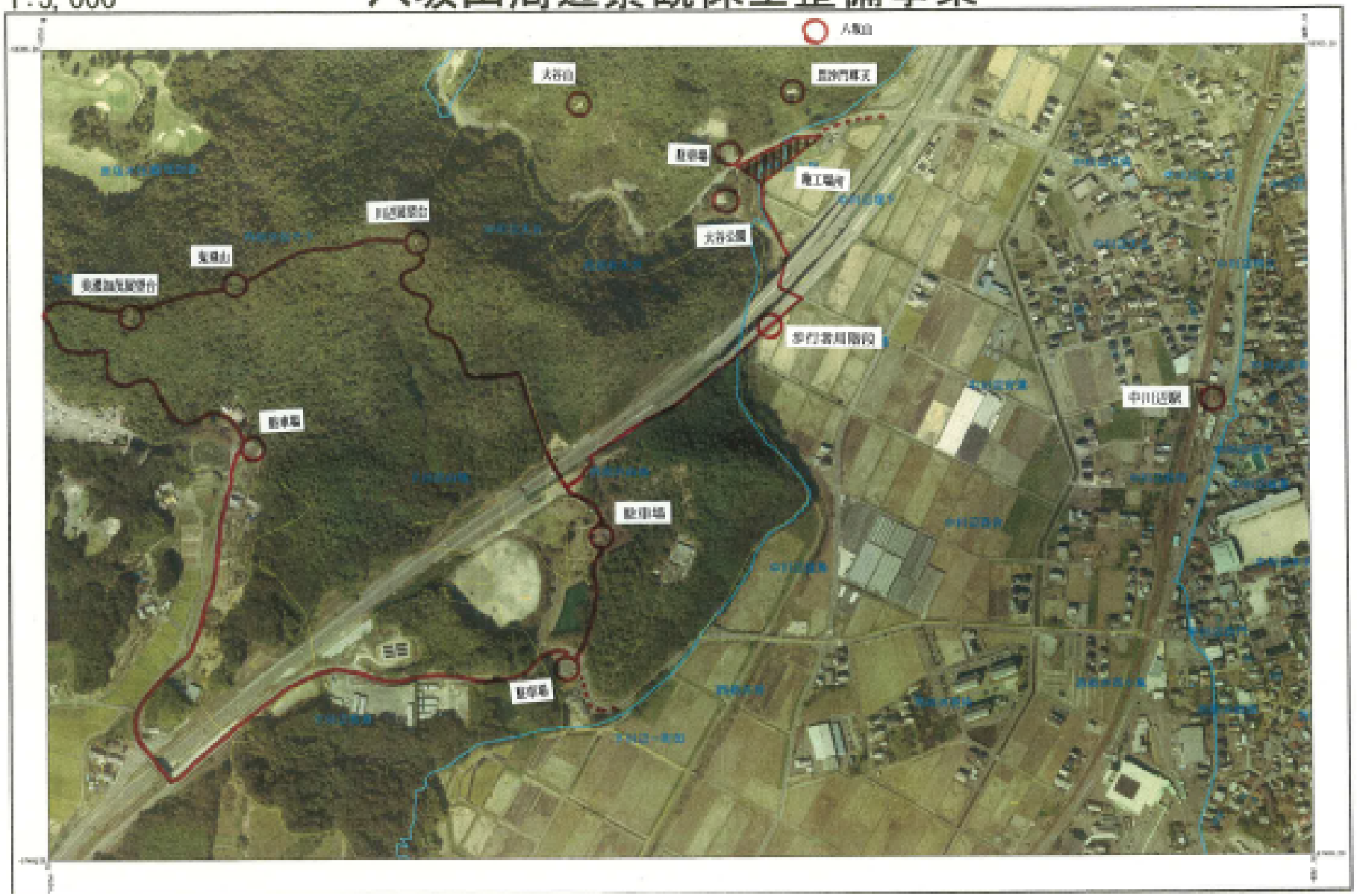
【住　民】　ガイドやインストラクター（老若男女がなれる）により収入を得る。
イベントの開催時などは家の空き地を有料Pで稼ぐ。
【将　来】　交流人口が増えた場合にはホテルなどの建設誘致を図る

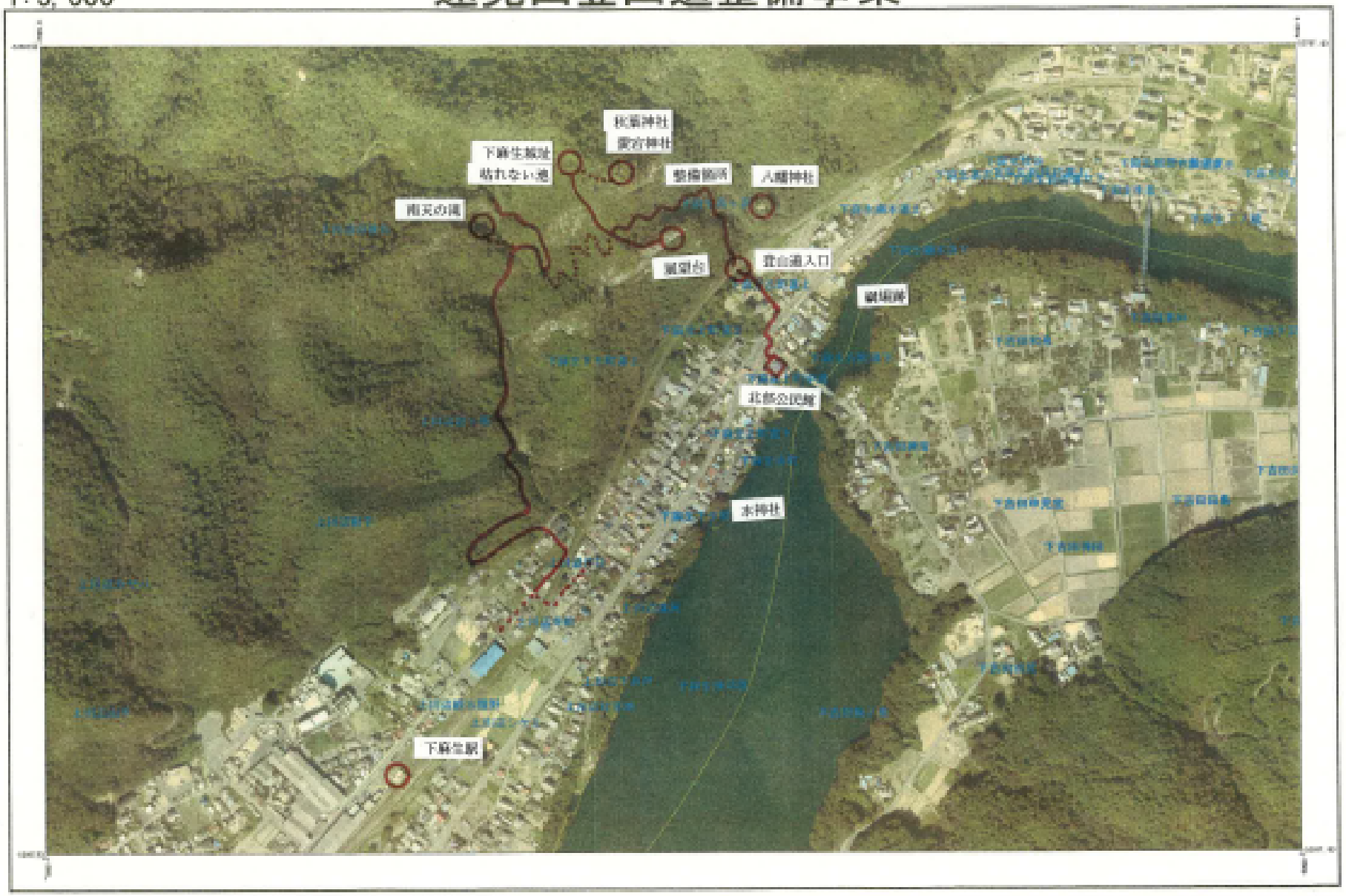
まとめ

政府は観光立国日本を掲げ、インバウンドの目標を大幅に増やし、『観光』を東京オリパラ2020のあとの地域活性化の大きな柱と考えてます。
AIやEV自動車などの新産業誘致も重要な課題ですが、地域住民が皆で関われる産業としてのスポーツ観光は、魅力的であり、川辺にはその資源があります。
ボート王国川辺からスポーツ観光の拠点川辺へと変身しようではありませんか。
水辺のスポーツはこれからの高齢化社会にもってこいです。とにかく浮くことは楽しい遊びです。
そのためにはまず拠点づくりと組織づくりが重要です。このプランから始めましょう。

1:5,000

八坂山周辺景観保全整備事業



1:5,000

遠見山登山道整備事業